

障害児、奇形児、摂食障害、貧困、エイズ、いじめ、虐待児、不登校、それらを持った親の苦悩、シングルマザーの産前産後の苦しみ、そして高齢者をめぐるあらゆる問題など、いたたまらなくなるような悲哀に満ちた事象が山積する中で、何故クラシック音楽など金持ちの互助組織に大賞を？という思いは誰もがもったと思います。

しかし NPO がその思いを形にし、社会課題解決に少しでも前進するための基準をつくり、それをしっかり学んで努力するように激励し、日本の NPO のレベルを引き上げるのがわれわれの使命であるとすれば、全日本ピアノ指導者協会は明らかに合格だと思えます。分野に貴賤はない、あくまで3つの便宜上の基準の達成度と、われわれのアドバイスを受け入れる努力を（半ば機械的に）評価するものだ、決して完璧な評価ではないが、これが現時点で出来得る最高のものだというのを、常に共有することが必要でしょう。

私の最後の「所感」でも、そのことを意識したつもりです。規模（世界平和か地域の数人のシングルマザー支援か）や達成度（効果）に本来貴賤はない、3つの基準も便宜的なもので完璧なものではない、そういう自覚をもちつつ審査しているというわれわれの苦悩を共有しようと思いました。そして最後に全日本ピアノ指導者協会は、昨年の宿題を真摯にとらえ、見事に改善を果たしたから大賞なのだと、「目的」や「中身」の尊さには触れませんでした。

全日本ピアノ指導者協会の「価値」は、大きな会員組織を、常にボトムアップによる改善に心がけていることだと思えます。

もうひとつは、音楽のもつ力です。音楽は200万年前に人類が、飢餓と肉食獣からの攻撃によって絶滅の危機に瀕していたときに、それから逃れるために群れのサイズを拡大した。その手段は、共食による食料の分かち合いと、子供を1年で母親から離して共同保育し、母親はすぐ次の子を産めるようにし、出産数を飛躍的に増やす（通常はゴリラと同じく3年は母親がだっこして母乳をやる）ことでした。しかし1年で母親から離された子は淋しくて泣く。お母さんはそばにいてやりたくともできない。そこで優しい声で子に応えた。言葉を発明する前なのでメロディーで安心させた。それが子守唄に発展し（世界中に子守唄があり、そこには多くの共通点－ハイピッチ、繰り返し、母音を伸ばすなど－がある由です）やがて親たちも歌で相互に共感を持ち合うようになり、それが踊りや祭りに発展して、大きなサイズの「社会」を運営することができるようになった。

つまり音楽は立場を超えて相互信頼と共感を持ちあう力を養ってくれるものなのです。「自由競争」や「主権」の名の下に、権力や富をめぐる争いで社会が分断し、それが核戦争に発展し兼ねないいま、この音楽による基本的な共感力の回復が必要だと言っても過言でないでしょう。もちろん音楽のみならず文化芸術一般にも同じことが言えます。個人の利益を超えた共益をもたらしてくれる力で、折角200万年前にご先祖さまが発明してくれた手段を、いま使わない手はないでしょう。

全日本ピアノ指導者協会の会員の団結力の裏には、こうした力もあるのではないのでしょうか。それは障害児など上記のすべての問題解決に適用できると思います。聴覚障害をもった子にも、他人と共鳴するという効果を音楽がもつことも最近分かってきましたが、この話は別途ご説明できればと思います。

近藤誠一